練習13　問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

今の日本人の欲望は留まるところを知りません。常に新しい物を欲しがる。美味しい物ばかりに目移りする。身の丈(注1)以上の生活を求め続けている。そして子供には過度の期待をかけ、能力以上の成果を望む。果たしてそこに本当の幸福があるのでしょうか。

ほんのつい最近まで、日本人は身の丈に合った慎ましい(注2)生活を送っていました。少なくとも私が幼少の頃はそうでした。背伸びをすることなく、不満を口にすることなく、慎ましい暮らしの幸せを感じていました。

かつてのような貧しい暮らしが良いというのではありません。ただ、身の丈に合わない生活には、きっと大きな落とし穴がある。そんな気がするのです。

（山田洋次「わたしの幸福論」『PHP No.679』PHP 研究所）

(注1) 身の丈：身長

(注2) 慎ましい：ぜいたくでない

問い　この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

1　昔は貧しかったが、今は欲しい物が何でも手に入り、現代の日本人は幸福である。

2　少し前まで日本人は貧しい暮らしをしていて、あまり幸福とは言えなかった。

3　今の日本人は背伸びして良い生活を求めているが、それでは幸福になれないだろう。

4　筆者が子供の頃は、自分の生活に満足しながら生活していて、幸福だった。

LIVEWORKSHEETS

練習14　問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

みなさんは、そもそも何のために文章を書くのでしょうか。

もし、私自身が同じ質問を受けたら、「自分を表現し、他者と関わりながら生きていくため」と答えます。学校の教科書や参考書をいくら読んでも、それだけでは他者との関わりは生まれてきません。知識として知ることと他者と関わるということは、質的に全く別次元のことだからです。知識をいくら積み重ねても、他者と関わることは永遠にできないでしょう。

理解し感動したことや一生懸命に考えたことを、拙くても(注1)いいから、試行錯誤(注2)しながらでもいいから、誰かにきちんと「伝える」練習をしてみましょう。それは、きっと社会に働きかけ、他の人々と共に生きていく練習にもなるでしょう。「書く」という行為は、静かに自分の内面を見つめることでありながら、同時に社会に向けて行動する第一歩にもなり得るのです。

（原和久『創作力トレーニング』岩波書店）

(注1)拙い：下手だ

(注2)試行錯誤：いろいろやってみて失敗しながら目的に近づいていくこと

問い　この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

1　書くときには「何のために文章を書くのか」をよく考えることが大切だ。

2　書くことは、誰かにきちんと「伝え」、社会に向けて行動することにつながる。

3　教科書や参考書で勉強しても、知識が増えるだけで、書くことは上手にならない。

4　書くことによって人は成長し、自分の内面を見つめられるようになる。

LIVEWORKSHEETS

練習15　問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

日本で生活している留学生の多くが、「日本人は家族の関係が薄い」という感想を抱くようだ。一人暮らしをしている大学生があまり家族と連絡をとらないことや、老人ホームなどの施設で暮らすお年寄りが多いことなどから、そう感じるらしい。「経済が発展した結果、昔は強かった家族の人間関係が、だんだん薄く、冷たくなったのだ」という意見もよく聞く。本当にそうなのだろうか。

ある全国調査によると、「あなたにとって何がいちばん大切ですか」という質問に対して「家族」と答えた人の割合は、1978年が23%、1988年が33%、1998年が40%、2008年が46%だった。家族がいちばん大切だと言う考えの人が30年で倍になったことがわかる。

一方、「職場の同僚とのつきあい」「隣近所の人とのつきあい」「親せき」について、「相談したり助けあったりできる関係」にあることが望ましいかどうかを聞いたところ、すべての項目において、「望ましい」と答える人の割合は減少傾向にあった。

問い この文章の内容として最も適切なものはどれか。

1　職場や地域、親せきとのつきあいは薄れているが、家族関係を重視する人の割合が高まっている。

2　経済発展をしても、家族関係や、職場や地域、親せきとの関係の強さはあまり変わっていない。

3　年とともに、職場や地域、親せきとの関係は強まりつつあるが、家族を大切に思う人の割合は増えていない。

4　家族関係だけでなく、職場や地域、親せき関係を重視する人の割合もすべて低下してきている。

LIVEWORKSHEETS

練習16　問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

目の前の相手が悲しんでいるとき、その自分の感情を思い出していただきたい。同情とか、共感とか、力になってやりたいといった気持ちが起こるだろう。また、人に親切にしたときや贈り物をしたときなど、相手がうれしそうな表情やしぐさをして、喜んでいるとわかれば、自分もうれしくなるだろう。このようにして相手の感情がわかり、それに対して共感する気持ちが生まれれば、それは相手に対する好感情につながる。

だが、喜んでいるのか悲しんでいるのか、さっぱりわからない人の場合はどうだろうか。その人にどう接していいかわからず、共感する気持ちもわかない。なんとなく敬遠(注1)したくなるのではないだろうか。(中略)

とくに若い世代は、感情を表にあらわさない人に対して、「わからない人」という評価を下し敬遠しがちだ。そのため、人と話すときに自分の感情をうまくあらわせない少年少女は、クラスメートたちから仲間はずれにされやすく、ときにはいじめられっ子になったりもする。感情をうまく表にあらわせない人は、対人関係が悪くなりやすいのである。

(本明寛『なぜ電車の席は両端が人気なのか――行動の心理学』双葉社)

(注1)敬遠：嫌がって避けること

問い　この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

1　相手の感情がわからない人は、仲間はずれにされたりいじめられたりする。

2　自分の感情を相手に対して上手に出していけば、良い人間関係を作りやすい。

3　目の前にいる人が自分の気持ちに共感してくれないと、その人との関係が悪くなる。

4　感情を表に出さない人より、表に出す人のほうが人間関係で問題が起きやすい。

LIVEWORKSHEETS